様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22530601
研究課題名（和文） 社会福祉実習における学習構造の探究とカリキュラム開発

研究課題名（英文） An Analysis on Student Learning Activities in Undergraduate Social Work Field Practicum.

研究代表者
黒田　文（AYA KURODA）
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：60368412

研究成果の概要（和文）：本研究は，社会福祉現場実習における実習生の学びの実態について，テキストマイニングを用いて考察することを目的にしている。実習の実施方法や状況については施設や機関によって差異のあることから，本報告では主に，病院や地域包括支援センターといった相談機関における実習を中心に解析を実行した。結果，病院実習の場合には，実際に MSW が利用者の相談に応じる面接に同席したり，医療サービスに関する苦情等に対応する場面を観察することを通じて，自らをこれまでの「一般的な生活者」としてではなく「援助者」として位置づけ，自分をコントロールして利用者と向き合うために何が必要であるかを模索する姿が浮かび上がっている。地域包括支援センターにおける実習では，地域へ出向く同行訪問や地域で開催される連絡会議の他，高齢者を対象にした各種の教室への参加を通じて，机上で見聞きした制度が利用者の日常生活でどう機能しているのか，その運用について「知る」という学びが顕著であった。病院の実習に比べると相談面接に同席する機会は減少するものの，援助の実際を自分の身に引きつけて考える学びの実態は存在しており，「援助者」としての自己を支える教育的スーパーヴィジョンが必要となってくることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study highlights students' experiences of social work field practicum by analyzing their reflective journals, and suggests the need to recognize the students' perception and provide the student supervision for "conscious use of self" in the process of learning activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	100,000	30,000	130,000
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：社会福祉現場実習，福祉教育，テキスト・マイニング

1. 研究開始当初の背景

社会福祉士を養成するための専門教育において核となるのは現場実習教育と考えられるが，「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」で指摘される通り[1]，そ

[1] 社会保障審議会福祉部会．(2006)「介護福祉士

の教育内容については，専門職として求められている高い実践力を有した社会福祉士が養成されているのか，社会福祉士として要求される技能を習得することが可能な実習内容となっているのか，などの問題が指摘されている。実践力を伴う専門職を養成するには，まず，効果的な実践を構成する一連の行動パターンを明確にし，それらを体系的に示すことができなければならないが，日本の社会福祉専門教育では，未だそのようなスキル体系が提示されずに専門教育が継続している現状である。上記の問題を解決するには，何ができるようになれば／どのような技能を身につければ，実践力を有するといえるかについて考えるだけではなく，現状の実習教育において，学生が何をどのように学び，また，実践力向上のために何が欠落しているのかについて明確にする必要がある。つまり，社会福祉士が専門性を発揮するために必要とされる基本的スキル体系を明確にしつつ，それについて学生がどのように学習しているかを示すことが求められるだろう。

2. 研究の目的

上記の問題をふまえ，本研究では，最初の手がかりとして，現場実習教育における実習生の「学びの現状」について明らかにしたいと考える。特に，実習期間中に日々の実践へのふりかえりとして記録することが義務づけられている実習日誌の内容を分析対象として，彼らがどのような内容を，どのように学んでいるのかについて検証する。

これまでも，実習における学びの構造については，学生の実習日誌（テキスト型データ）を対象として定性型手法を用いた分析が行われているが[2)]，本研究では，同テキスト型データに対する分析にあたってはテキストマイニングの技法を活用する。本研究でテキストマイニングを採用する理由については，以下の点が挙げられる。

従来の定性型手法では，文書を「読む」という作業を中心として研究者の経験や主観によって分類や解釈を行うため，研究者の力量や関心により得られるものが異なる可能性がある。それに対し，テキストマイニングの場合は，対象となるテキスト型データを誰が扱っても，極力おなじような結果が見出されるような方法で分析ができるからである。よって本報告では，研究者の主観をなるべく混在させない，ならびに，再現性の保証という観点からテキストマイニングを用いる。とはいえ，それは決してこの技法が従来のやり方に比べ優位であることを主張するものではない。本研究者がこの技法を用いるのは，主観の混在を狭めた手法から得られた結果が，従来の手法により得られた結果と適合するのであれば，それは検証という意味で価値があると考えるからである。

3. 研究の方法

本研究者の勤務校において 2010 年度から 2012 年度に現場実習を履修し，かつ，本研究へのデータ提供に同意した 3，4 回生の実習生 28 名の実習日誌を分析の対象とした。彼らには，本研究の目的と倫理的配慮について説明を行ったうえで同意が得られた者には，実習期間中に記録した実習日誌の提出を求めた。それらの手書き日誌については電子化テキストへ変換する作業を行い，テキストマイニングの技法を用いて解析を実行した。

解析方法については，書き手（実習生）が

制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」，厚生労働省.

2) 坪内千明（2010）「相談機関実習の学びの構造」『日本ソーシャルワーク学会』19, 57-69.

何に対して評価・判断を行っているのかについて把握するため，係り受け解析を用いてカテゴリを抽出した。さらに，係り受け関係において，受ける語と係る語が認識できるよう，第二次分析ではコンセプト・パターン表示を用いて，文章で表明された行為や動作とその対象との関係を抽出した。本研究は，実習日誌というテキスト型データを用いて，実習に関する学びの実態を探索的に研究することが目的であるため，カテゴリ項目の選出に際しては，あらかじめ想定したカテゴリを手動で用いず自動化生成を選択し，データに対する最適解を自動的に探し出す言語学的手法に基づく抽出を採用した。その他，自動化手法を採用した理由としては，データ内で生起する語彙に対し，似たような意味をもつ語句を言語学的な視点からグループ化してくれるという利点を活用できるという点が挙げられる。ただし，自動化生成から適切な結果をえるために，データ処理の手続きとして，1 回目の自動化手法抽出で上手く括れなかった同義語や類義語については，表現語句を集約して再度解析を実行した。なお，解析アプリケーションには IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 を使用した。

4. 研究成果

本稿では，H21年度より実施されている社会福祉士養成の新カリキュラムを念頭に入れ，実習教育の内容として力点が置かれるようになった，相談援助，多職種連携，チームアプローチ，他機関への働きかけなどを実践する機会が多い，病院，地域包括支援センターでの学びの実態（各機関4名，合計8名の実習生の日誌を対象）について報告する。また，実習の実施方法や状況については，施設や機関によって差異のあることから，解析結果については各配属機関別に報告を行うこととする。結果については，主に，視覚化パネルの有向レイアウトグラフを用いて抽出されたカテゴリの関係構造について考察する。特に，有向レイアウトグラフでは，1）回答者の記述内容に関する重複度合いが表示されるのでカテゴリ間の関係について視覚的に確認できる，2）ルート（基）となるノード（集合点）については下位ノードが整理され，得られたカテゴリ間の構造について階層状に把握できる利点がある。

4.1 病院の実習

解析の結果，カテゴリについては総数20が得られた。

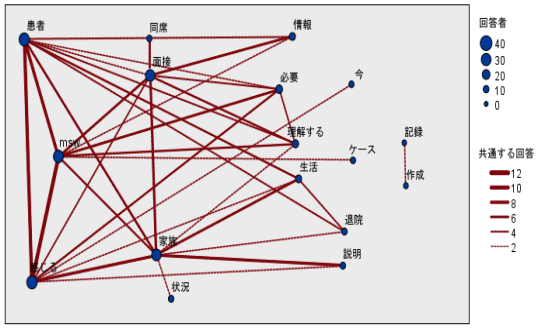

図1　病院における実習

言及頻度の高い順に抽出されたカテゴリを列挙すると，「利用者（患者）」「面接」「MSW」「必要」「家族」「情報」「生活」「退院」「説明」「記録」「生活保護」「状況」が挙げられる。語彙群の文脈（表1を参照）からは，利用者とMSWの面接に実習生が同席し，退院援助を目的とした家族への情報提供や相談，生活保護を受給する利用者の生活に関する相談，医療サービスに関する苦情対応場面等を観察しながら，自らをこれまでの一般的な生活者ではなく援助者として位置づけ，自分をコントロールして利用者と向き合うためには何が必要であるかについて模索する姿が浮かび上がっている。サービス利用について判断するためのアセスメント状況や，利用者との関係形成に影響を与えそうな自分自身の行動を認

識しようとする状況把握，ならびに，援助者が保持すべき知識について自覚的になろうとする学びが特徴的である。

表1　病院実習に関する日誌の内容

苦情の処理についても，MSWが対応する必要がある
年金の申請や手帳の更新等の手続きでは複雑なこともあり，できることは患者本人にしてもらい，できないことをサポートする必要がある
家族との面接で，インテークにおけるラポール形成を学んだ
サポートするためには，年金についての知識が求められるため，学び直す必要があると感じた
面接では自分が援助する立場になったことをイメージした上で，より多くのことを学んでいきたい
面接は傾聴を中心に進められていると学んだ
面接を通じてMSWの業務はあくまでも患者や家族が困っていることに対して知識や情報を提供したり，施設との仲介をする等，サポートする立場であって，行動するのは患者や家族である
MSWの援助技術として，あらかじめ入手していた情報でも，本人の口から話してもらえるように面接を進めていく必要がある
MSWは面接の際に，自身の体調等を見つめ直す必要がある
援助者側が嘆い願していると患者側にも不安を与えることとなり，良い援助関係を築くことができないと学んだ
業務が重なり，ここのケースにじっくりと関わることが難しいときは，患者のために優先順位をつけて対応することも必要である
自殺予防対策連絡会に同行したことによって，島根県は自殺率がワースト４位で様々な機関が自殺対策総合計画九つの柱に沿って取り組んでいることを知った
自殺予防と再発の防止という点では，情報の共有化やネットワークの構築が大事である
インテーク面接は，この人であったら相談してもよいと思ってもらえるように働きかける重要な役割であると実感した
状態に変化がないと診察が挨拶程度のコミュニケーションになることがあるが，定期的な診察やコミュニケーションが大事で状態の変化にすぐに気が付くことが大事である
特に介護保険の説明が患者家族との初対面の場であると信頼関係を築けていないうえに情報も少ないため，より一層導入部分が重要になる
1人の患者に対して，多職種が関わっていることを学んだ
MSW には医療の知識がかなり求められることを痛感した
患者の状況や家庭状況をコミュニケーションを通して把握した上で，退院後の生活について一緒に考えるという姿勢を示す必要がある
1人の患者と継続して関わりを持つにつれて，一つの問題点だけではなく，様々なニーズが見えてくることを学んだ
病気や薬についての知識がないと患者に対して良い援助ができないことを実感した
ケース記録を作成するために，面接中にメモを取らせていただいくなど面接の実際について学んだ
ロールプレイで実際に患者や家族からよく質問されるような項目を学ぶことができた
MSWは周りから何でも屋と言われるというが，これはマイナスな意味ではなく，患者にとって，何でも相談できて何でも手伝ってくれるのはMSWしかいないことを意味すると考える
記録をもとにパソコンで実際にケース記録を作成させていただくなど記録の方法について学んだ
退院前の家族は退院後の新たな生活に不安を抱えており，それに対処することの重要性を学んだ
家族にもそれぞれの家庭や生活があって，その生活を急に変えることはとても難しいと感じた
面接では，家族の在宅介護の話を傾聴しつつも，退院後どのような生活を送るのかという本題からそれないよう配慮する必要がある
面接に同席してみて，患者の生活や栄養改善を行うために地域の多職種が連携していることを学んだ
患者本人が持っているノートに多職種がメモを残すことで，患者について把握できる
ノートはクリティカルパスとまではいかないが，地域の多職種連携に役立っている
院内においても処方された薬や検査，看護データなどデータ共有のしくみがあることを理解した
業務の中に退院援助があるが，退院援助を行うためには退院先との信頼関係が必要だと理解した
信頼関係を築く手段の一つとして MSW が患者の日常の様子を包み隠さず施設側に伝えることが必要だと実感した
Aさんの面接を通じて患者家族に対して過度の期待を持たせず事実を伝えることの大切さを学んだ
患者の情報を少しでも多く知ることによって施設側も安心して受け入れることができると理解した
MSWには一般的に退院援助が求められがちであるが，患者が安心して退院できるようなネットワークづくりや信頼関係づくりも重要な業務であると理解した
ちょっとした刺激（医療費についての話等）によって気持ちが不安定な状態になることもあり，配慮が必要である
転院の手続きについては，医師や看護師を中心に，MSW や必要があれば，生活保護ワーカーも関わりながら，スムーズに行う必要があり，院内連携の重要性を認識した
ケースでは，患者が断癌で，外科病棟に入院していたため，精神科と外科のコーディネーター役として MSWが機能することが重要であった
Bさん家族への介護保険の説明前に今回の面接の目的や病棟としてのニーズを把握した上で，どのように面接を進めるかについてイメージすることや，家族からどのような情報を得る必要があるのかをあらかじめ考えることが重要だと痛感した
面接を通じて，MSWや看護師がどうするのかを決めるのではなく，本人や家族の意思が重要であり，その意向に沿って援助していくことが大切だと理解した

4.2 地域包括支援センターの実習

解析の結果，カテゴリについては総数27が得られた。

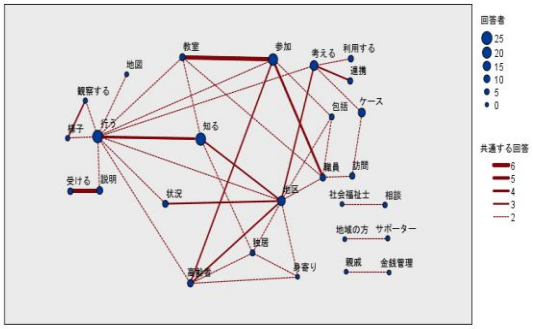

図2　地域包括支援センターにおける実習

地域包括支援センターの実習では，地域へ出向く同行訪問や地域で開催される連絡会議，高齢者を対象にした各種の教室に出席する等の参加を通じて，机上で見聞きした制度が現実的に日常生活でどのように機能しているか，その運用について「知る」という学びが顕著である。病院の実習に比べると面接に同席する機会は減少する傾向があるものの，支援の実際を自分の身に引きつけて考える学びの実態が同様に存在する．

表2　地域包括支援センターに関する日誌の内容

苦情の処理についても，MSWが対応する必要がある
年金の申請や手帳の更新等の手続きでは複雑なこともあり，できることは患者本人にしてもらい，できないことをサポートする必要がある
家族との面接で，インテークにおけるラポール形成を学んだ
サポートするためには，年金についての知識が求められるため，学び直す必要があると感じた
面接では自分が援助する立場になったことをイメージした上で，より多くのことを学んでいきたい
面接は傾聴を中心に進められていると学んだ
面接を通じてMSWの業務はあくまでも患者や家族が困っていることに対して知識や情報を提供したり，施設との仲介をする等，サポートする立場であって，行動するのは患者や家族である
MSWの援助技術として，あらかじめ入手していた情報でも，本人の口から話してもらえるように面接を進めていく必要がある
MSWは面接の際に，自身の体調等を見つめ直す必要がある
援助者側が嘆い願していると患者側にも不安を与えることとなり，良い援助関係を築くことができないと学んだ
業務が重なり，ここのケースにじっくりと関わることが難しいときは，患者のために優先順位をつけて対応することも必要である
自殺予防対策連絡会に同行したことによって，島根県は自殺率がワースト４位で様々な機関が自殺対策総合計画九つの柱に沿って取り組んでいることを知った
自殺予防と再発の防止という点では，情報の共有化やネットワークの構築が大事である
インテーク面接は，この人であったら相談してもよいと思ってもらえるように働きかける重要な役割であると実感した
状態に変化がないと診察が挨拶程度のコミュニケーションになることがあるが，定期的な診察やコミュニケーションが大事で状態の変化にすぐに気が付くことが大事である
特に介護保険の説明が患者家族との初対面の場であると信頼関係を築けていないうえに情報も少ないため，より一層導入部分が重要になる
1人の患者に対して，多職種が関わっていることを学んだ
MSW には医療の知識がかなり求められることを痛感した
患者の状況や家庭状況をコミュニケーションを通して把握した上で，退院後の生活について一緒に考えるという姿勢を示す必要がある
1人の患者と継続して関わりを持つにつれて，一つの問題点だけではなく，様々なニーズが見えてくることを学んだ
病気や薬についての知識がないと患者に対して良い援助ができないことを実感した
ケース記録を作成するために，面接中にメモを取らせていただいくなど面接の実際について学んだ
ロールプレイで実際に患者や家族からよく質問されるような項目を学ぶことができた
MSWは周りから何でも屋と言われるというが，これはマイナスな意味ではなく，患者にとって，何でも相談できて何でも手伝ってくれるのはMSWしかいないことを意味すると考える
記録をもとにパソコンで実際にケース記録を作成させていただくなど記録の方法について学んだ
退院前の家族は退院後の新たな生活に不安を抱えており，それに対処することの重要性を学んだ
家族にもそれぞれの家庭や生活があって，その生活を急に変えることはとても難しいと感じた
面接では，家族の在宅介護の話を傾聴しつつも，退院後どのような生活を送るのかという本題からそれないよう配慮する必要がある
面接に同席してみて，患者の生活や栄養改善を行うために地域の多職種が連携していることを学んだ
患者本人が持っているノートに多職種がメモを残すことで，患者について把握できる
ノートはクリティカルパスとまではいかないが，地域の多職種連携に役立っている
院内においても処方された薬や検査，看護データなどデータ共有のしくみがあることを理解した
業務の中に退院援助があるが，退院援助を行うためには退院先との信頼関係が必要だと理解した
信頼関係を築く手段の一つとして MSW が患者の日常の様子を包み隠さず施設側に伝えることが必要だと実感した
Aさんの面接を通じて患者家族に対して過度の期待を持たせず事実を伝えることの大切さを学んだ
患者の情報を少しでも多く知ることによって施設側も安心して受け入れることができると理解した
MSWには一般的に退院援助が求められがちであるが，患者が安心して退院できるようなネットワークづくりや信頼関係づくりも重要な業務であると理解した
ちょっとした刺激（医療費についての話等）によって気持ちが不安定な状態になることもあり，配慮が必要である
転院の手続きについては，医師や看護師を中心に，MSW や必要があれば，生活保護ワーカーも関わりながら，スムーズに行う必要があり，院内連携の重要性を認識した
ケースでは，患者が断癌で，外科病棟に入院していたため，精神科と外科のコーディネーター役として MSWが機能することが重要であった
Bさん家族への介護保険の説明前に今回の面接の目的や病棟としてのニーズを把握した上で，どのように面接を進めるかについてイメージすることや，家族からどのような情報を得る必要があるのかをあらかじめ考えることが重要だと痛感した
面接を通じて，MSWや看護師がどうするのかを決めるのではなく，本人や家族の意思が重要であり，その意向に沿って援助していくことが大切だと理解した

本研究では学びの実態に関する解析結果を受け，現状のカリキュラムをどのように修正することが可能であるかという側面まで言及する予定であったが，手書きデータである実習日誌を読み込む作業に当初計画より大幅な時間を要したため，提言までは踏み込んでいない。

とはいえ，実習教育に関する現在のスタンダードプログラムにおいては，獲得すべき知識についてかなり具体的に記述されているものの，学生が「自己」を専門職としてどのように活用するかにかかわる教育内容については提示されていない。この “use of self” といわれる部分が実習の核であり，また，取り扱いが難しい部分であるが，本研究で実習日誌を分析した結果からは，利用者と直接接する機会が多い相談機関の実習では，実習生としての立ち位置や役割について悩む内容が散見され，実習生がジレンマ感情を抱えやすいのが「自己」に関わる領域だと理解される。

特徴的であるのは，配属先の環境に慣れるまでは，業務内容に関する記録が多いのに対し，一通り実習の業務を把握できるようになると，援助にかかわる問題意識が頭をもたげ，自分の視点を前面に押し出すようになる転換期がみられることである。転換期以降は，自分の行動について客観的に分析するようなコメントも多くなっている。しかし，援助者としての「自己」に対する意識の深まりが実習期間中にうまくフォローされない，もしくは，問題に気づいても，自分ではどうしようもないと思われることを次々に見せつけられたまま実習が経過してしまうと，その後は，問題解決について考えるヒントが与えられずに記録の内容が徐々に問題の核心から逃避したような表面的な記述になっていく傾向が見受けられた。上記の転換期以降は，援助専門職を目指す「自己」をどのように活用したらよいのか，もしくは，将来的にどのように備えたらよいのか，という側面について支持的なスーパーヴィジョンが必要となる時期と認識し，知識的な内容の習得に加え，認知・情動面に関わる事項についても教育内容として提示し，プログラムに組み入れる必要があると考える。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

(1) 黒田　文，「グループファシリテーションの技能向上を目指した教育プログラムの検証」，第 23 回山陰研究サロン，島根大学（松江），2013 年 1 月 16 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田　文（KURODA, AYA）
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：60368412